

## ミニ学習

工藤祥樹事務主任が、パンフレット「あれ？おかしい。」を使って、問題提起しました

・社会保障とは、「私たちが心に体に無理をせず、働き生きることができる社会づくりを志向するもの」です。社会保障の機能としては、主に①生活の安定・向上、②所得再配分機能、③経済安定機能の3つがあげられます。

・憲法の条文でいうと、「25条：最低限度の生活の権利」と「13条：幸福追求の権利」です。国が国民に保障する義務をうたっています

・そもそも憲法とは何か？1946年の制定時に文部省は『あたらしい憲法のはなし』という冊子をつくり子どもたちに配布しました。「憲法とは、国でいちばん大事な規則、すなわち『最高法規』というもので、その中には二つのことが記されています。その一つは、国の治め方、国の仕事のやりかたをきめた規則です。もう一つは、国民のいちばん大事な権利、すなわち『基本的人権』をきめた規則です。」

・社会保障を守るたたかいのなかで国民の権利を守り拡大してきました。そのいくつかの例として、①朝日訴訟、②水俣病のたたかい、③訪問看護を国の制度とした民医連のとりのくみ、④大飯原発再稼働を止めたたたかいなどを紹介しました。

・最後に、私たちは何ができるだろう？目の前の人を助けたいという思いが大切。社会保障とは何かをスタート地点に、自分たちの仕事の歴史的な位置づけ、社会的に要請されていることは何かを考え、学ぶことが大切です。



# どんな時に、「社会保障と憲法」について意識しますか？

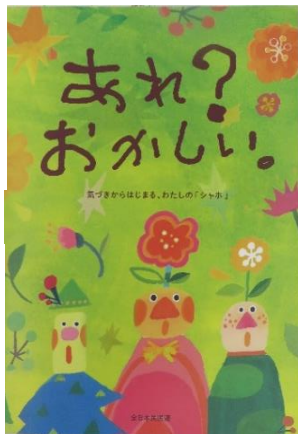
■前の病院で、薬局で話の長が長い患者さんが

■この質問、めっちゃ難しいよ！そんなこと意識したことなかった。反省すべきことですね！

■患者さんが生活保護ではなくなったとき、自立できたんだと思った。

・「あの人の幸せって何だろう？」 「自分がおじさんの子供だったら？」と出席者から水を向けられたが・・・

■ 社保を意識したとき？・・・



■ 憲法で保障された生活保護

のに、タバコ・ギャンブルをやっている生活保護の人がいるのを見たとき、生保の人は優遇されているのだろうかと思った。

■ 私の卒論が「社会保障と年金」だった。国民の権利があるはずですが・・・でも、社会保障

護制度があるが、イメージの悪い生保の人に矛盾を感じたことがある。

■ 往診患者の家に居候していたおじさんのことが気になる。どうして生活を変えられることができないのだろうか？食事や保清とか金銭管理とか・・・社会保障や憲法との関連と言われても・・・

■ 年金生活者は苦勞して細々と生活をしている

いた。生保の人で自分の生活が苦しいことをいろいろ語ってくれた。衝撃的だったが、次につながることはできなかった・・・

九月二六日、平診九条の会運営委員会を一四名の参加で開催しました。戦争体験を聞く八回目」を薬剤師の澄川大樹さんが報告、続いて全日本民医連発行のパンフ「あれ？おかしい。」をテキストに工藤祥樹事務主任がミニ学習の報告をし、参加者全員が「どんな時に社会保障と憲法について意識するか？」を発言しました。

# 平診九条の会 かべしんぶん

2016年10月号  
(通算35号)  
発行：平診9条の会

戦争法強行採決  
一年 9.19 行動



芦別でもスタンディング。国会前の行動には2万3000人が参加。野党は共闘！

# 戦争体験を聞く 第8回

患者のKさん(83歳・女性)から薬剤師の澄川大樹さんがお話しを聞き、その報告をしました。



2トトラックをつり下げて空輸する陸上自衛隊のCH47輸送ヘリ=9月13日、沖縄県東村高江

## あさがお 写真展



今年のあさがおは10月中も咲きそうです。下の写真は9月末



### 「戦争する国」づくり、「戦争法」の実行へと安倍政権は暴走中。衆院選でも野党は共闘で！

7月の参議院選挙中、安倍首相は、かたくなに憲法を語ることを避けました。しかし、この選挙結果をテコに改憲に動きだしました。その対象は、「憲法9条」だけではなく、「非常事態条項」を憲法に書きこみ、「基本的人権をも制約する」ねらいがあります。沖縄では米軍基地の強化のため、住民の反対を押し切って「高江」「辺野古」「伊江島」で米軍と自衛隊がやり放題、しかも県民の反対運動を本土の機動隊を導入し暴力で弾圧しています。参院選後も、引き続き「野党は共闘！」は維持されています。

Kさんは、戦時中、山形県の真室川村(山形と秋田の境ぐらゐ)に住んでおり、そこで空襲を経験した。最初の空襲は午前中。体育館で遊んでいたら、先生が走ってきて「B29だー」と叫んだ。そこで近くの杉の根元まで避難して、じっとしていた。午前中の空襲が終わった後、家に帰ってきたらみんな防空壕にもぐっていて、誰もいなくて心細かったのを覚えている。

その後、隣組の防空壕でみんなと合流した。そこで友達が手にセミをもっていたのだが、その子に大人たちがセミの声を鳴らしちゃだめだと言っていた。実際には蟬の声なんて空襲している人に聞かせるはずなのだが、みんな必死だったんだと思う。この空襲では、民間人には機銃による掃射を行つたため、空襲後は自宅の扉や窓に穴が空いており、床には弾が刺さっていた。道路にも葉莖(やつきょう)が大量に落ちていた。近くの木工場には爆弾による空襲を行い、近くにあった木工場は全て燃やされてしまった。昼ごろからは馬車で怪我した人たちが近くの寺に運ばれてきた。腹に大きな穴が空いた人など、ひどい怪我をした人がいたのを覚えている。近くは消毒液のにおいが充満していた。

終戦の知らせが入った時は、家族みんなで仏壇の前に集まって、死ぬより他はないと言われた。アメリカ人が来たら女子はみんな強姦されるから髪を切れとも言われたが、実際はそんなことはなかった。戦時中はほとんど授業はせず、人が足りなかつたため飛行場で草刈りや砂利拾いをよくしていた。飛行場まで飛行機をみんなで引つ張っていったこともある。

戦争については、二度とするものじゃない、みじめなもので、思い出に残る良いことは何もなかつたとおっしゃっていたのが印象的だった。